



生活圏が広がった所為だろうか、ラベルを見ないと安心して財やサービスの選択が出来ない世の中になってしまったようだ。先日テレビで経験の浅い医師が難しい心臓手術を行い、結果として患者が死に至ったとの報道を見た。医療というサービスに的確なラベル表示がなかったための悲劇と言えなくもない。

数十年前、戦後が終わった終わらないと言っている頃、私の記憶にラベルはあまり見当たらない。

豆腐はどんぶりをもって近くの豆腐屋に買いにいったし、魚も行商のおばさんが売りにきたのを新聞紙でくるんでもらっていた。子供にとって加工食品の代表である飴玉も大きなガラスの容器に入っている一個一個ビニールで包まれたものがバラで売られていた。お医者さんは親の代からのかかりつけで、取っ付きにくい根は優しい人であるとの安心感からその処方信頼した。近所のおじさんは学歴も職業も地位も知らないがその人となりは日常の付き合いの中で分かっていた。

すべて自分の五感が頼りだった。人間社会にも野性の持つ合理性がまだ生きていたのだろう。

現代人はラベルがないと安心して価値判断が出来ないようだ。ネクタイの良し悪しを表の柄ではなく裏のラベルに書かれたメーカー名で判断する人がいる。カバンの良し悪しも材質や縫製よりもブランド名の方が大事であるらしい。名刺に書かれた資格肩書き役職もその人のラベルと言ってもいいだろう。判断材料がラベルしかない場合も確かにあろうが、矢張り自分の五感と理性がその主役であるべきでラベルが本体の中身より偉くなってもらっては困る。

「label」を英和辞典で引いて見た。「札、はり札、荷札、標号、商標」とある。どれも今一しっくりこないのは日本社会がまだラベルに慣れていないからだろうか。

